

記録集

ファンタスティック☆ライブラリー・105

講演とワークショップ

鎌倉の近現代史資料

とき 2016年11月5日(土)13:30～16:10
ところ 中央図書館3F 多目的室
主催 ファンタスティック☆ライブラリー実行委員会

目次

1. 趣旨
2. 実行委員長のあいさつ・これまでの経緯
3. 講演会:永野征男「地域学の確立と近現代史資料の役割」
4. ワークショップの記録
5. 第2部を聴いての感想
6. 参加者のアンケート・感想より

1. 趣旨

鎌倉の近現代史資料の収集・保存・活用について、ファンタスティック☆ライブラリー・105 実行委員会の取り組みは、3 年目を迎える。鎌倉の近現代史を彩る魅力的な資料・建物・景観を含め貴重なすべてを、いま掘り起こし、保存しなければ永遠に失われる時期を迎えている。今年は一歩先へ歩み始めたい。「鎌倉に『近現代史資料館（文書館・学習交流館）』設置をめざし、具体的に歩み出す市民が行政と協働する流れをつくり出すべく講演会で学び、ワークショップで忌憚なく意見を交流したい」というのが、2016 年の願いである。

2. 実行委員長のあいさつ・これまでの経緯（島本千也^{しまもとかずや}）

ファンタスティックライブラリー実行委員長の島本です。ファンタスティックライブラリーには、いくつかの図書館に関わる団体が参加しています。その中から、かまくら女性史の会、図書館とともだち・鎌倉（略称：TOTOMO）、鎌倉の別荘地時代研究会、本の修理ボランティアの4つの団体から有志が出て、本日の実行委員会をつとめています。

まず、本日に至る経過を述べます。今回が3年目になります。2年前に「鎌倉の近現代史資料の収集、保存、活用について」というシンポジウムをしました。その中で、いろいろな意見が出ましたが、鎌倉市の近現代史資料への対応がお粗末ではないか、もう少しバックアップできないか、そのあたりが出発点です。

丁度、その会の時に鎌倉市が旧鎌倉図書館を壊すという情報を聞きました。その時ひらめいたのは、とんでもないということと、壊してはいけない、あの建物を資料館に使ったらと期待を抱きました。その後の「ととも」を中心とした保存運動に参加しました。結果的には、一年後位に市長の判断で建物自体は保存ということになりました。その後、私たちは旧図書館を近現代史資料館として使えたらと、裏付けのない期待を抱いていましたが、建物を何に使うのか、鎌倉市は市民には何ら相談もなく、建物は学童保育の施設（子どもの家）と子ども会館にするということで、（要するに長谷の旧諸戸邸で使用されているような機能にするということで）、その後進んでいます。保存の運動に学童の人はほとんどノータッチだったのに行政の必要性だけで決まったようです。

耐震補強他の工事で2億5000万円位の見積もりだそうです。

昨年、この会では鎌倉市の公文書の保存状態がどのようになっているのか勉強会をしました。時間がないので詳しくは言えませんが、とんでもない状態になっている、（本日の部屋）両サイドに段ボール箱がありますがあれが鎌倉市の保存文書、これから仕分けをして、取り組もうというレベルのようです。

ほかに寒川文書館の見学、藤沢の鶴沼行政センター内にある鶴沼郷土資料展示室（公設民営で運営）の見学会をしました。鎌倉市の近現代史への対応は心もとない限りであると思います。

3年目の今年はどうするか、鎌倉市は旧図書館を学童保育の施設と子ども会館として進めていて、市の担当者はそれ以外は念頭にないようですが、それはあまりにもったいない。鎌倉市の近現代史の置かれているお粗末な状況、行政の公文書の保存についても対応は十分ではない。そんな中核拠点にできないか、どなたかキーマンと言ったら失礼ですが行政にある程度力を及ぼして頂けるような方に講演を依頼しようということになりました。尚かつ、その後ワークショップでこの問題についていろいろな意見を集めようということがこの会の背景です。

失礼な言い方をしましたが、永野先生のご紹介です。言うまでもなく先生は日本大学で長らく都市学を担当されています。また、文理学部で鎌倉学の講座を6年間実施されています。鎌倉についての、様々な分野の研究者を集めて10回位講座を主宰されています。鶴見大でも鎌倉学の講座もお持ちです。鎌倉についての知見は、現在先生の元に集まっていると言っても過言ではありません。また、山ノ内にお住まいで若い頃から鎌倉には並々ならぬ注視、関心をお持ちです。御成の講堂問題についても若い頃から係わっておられました。こういう言い方

も変ですが、鎌倉市の職員というのは大方、他の街にお住まいで、鎌倉に対する愛情があまりないのではないかと思います。永野先生は鎌倉に対する並々ならぬ愛情をお持ちの方で、鎌倉市のまちづくり審議会や都市計画審議会の委員をされています。その折にちらっとお聞きしたのですが、委員、職員があまりに不勉強なんだと怒りをお持ちの先生でもあります。

本日は、「地域学の確立と近現代史資料の役割」ということで、鎌倉学をされているその実践を踏まえて鎌倉の近現代史がどういう期待というか、役割を担っているのかという話を聞けるのではないかと私も非常に楽しみにしています。これまでの鎌倉は中世史に偏っていて、どうしても近現代史には冷たい対応だったのではないかと思います。しかし、最近は風向きがちょっと変わってきているように思います。「日本遺産」に登録されたとか「歴史まちづくり法」ということで多分に近現代史が中核を担うのではないかと思います。今日のお話は、「地域学の確立」がキーワードになると思いますが、そういう話をいろいろとぜひ聞かせて頂ければと思います。よろしくお願いします。



「地域学の確立と近現代史資料の役割」

永野 征男

〔講演要旨〕

① 序：最近のメディア報道への疑義

- ・「大船資生堂跡地」への大型集合住宅建設と土地の属性。
- ・大船市街地開発は我が国の近現代史に残る理想郷計画。
- ・昭和初期の開発計画に関わった鎌倉町当局。

② 国(文化庁)の考える「近現代史」

- ・歴史研究における近現代史。
- ・考古学的解釈の定義。
- ・近現代の「埋蔵文化財」とは。
- ・遺跡保存に対して地元自治体は何をすべきか。
- ・歴史都市「京都」の近現代史に対する施策。

③ 「自地域」を知るための「地域学」視点

- ・全国に成立した地域学ブームの火付け役。
- ・東北地方における具体的な事例。
- ・大学における地域学の事例。

④ 結：今何故「地域学」に拘るのか

〔プロフィール〕

日本大学名誉教授・理博。専門領域：都市研究・地域論。

現在：横浜市立大/鶴見大/日本大講師、州立ワシントン大客員研究員。

都市計画審議会委員/まちづくり審議会委員(鎌倉市)／県立鎌倉高校評議員(県教委)

講師歴：横浜国大・岩手大・日本女子大・明治学院大・茨城大・東京学芸大・熊本大など。

朝日カルチャーセンター・横浜市・調布市・川崎市などの市民講座講師。

3. 講演会：^{ながのゆきお}永野征男（日本大名誉教授）「地域学の確立と近現代史資料の役割」

【講演要旨】※スライド使用

本日は、横浜市大で12時まで講演（横浜市主催）があり、その後、すぐにこちらにきました。今日は、第二部の企画を事前にお聞きしていましたので、その企画の主旨に触れたほうが良いと考え、本テーマ内容でお話しすることにしました。

キーワードの一つは、「地域学」とは何か、いま同学はちょっとしたブームです。近現代をどのように捉えるべきかは、地域学が注目する現実の地域問題に繋がります。私の専門である地理学は、近現代を中心に研究することが主です。その意味では、中高「地理」と大学の「地理学」は大きく異なります。

実は先週、館山市で戦時中の地下壕を見学してきました。近現代の重要な資産として、市当局は市民の協力のもとに「埋蔵文化財」として保存活用に努力しています。いまは世界遺産の影響もあり、どうしても建造物が注目されますが、これら戦争遺跡を残す地元の努力に大きな感銘を受けました。これと同じことは、全国各地で遺跡への見直しが始まっています。近現代を注視する点で、鎌倉は大きく遅れています。

具体的に「地域学」が大学教育の場でどこまで浸透しているかは、都内の数大学でも世界を地域区分する中で、地域研究を主体にしたカリキュラムが組まれてきています。近くでは、横浜国大が来春スタートさせる新学部「都市科学部」でも、開設の主目的は「横浜学」だと云われています。

1) 最近のメディア報道に対する疑問

・「大船資生堂跡地」への大型集合住宅建設と土地の近現代史は

市は、同所の跡地に大型マンション（400戸）を許可する方向にある。計画そのものには問題はないが、市の発表に基づくメディア報道記事はいかがなものでしょうか。

地域ミニコミ誌の「タウンニュース」2016年9月9日号「資生堂工場跡地 マンション・福祉施設に」では、副題に「土地の一部は市へ寄付」とあります。ここに一つの疑問を感じます。記事によると、市は寄贈される土地を今後何に使うのか、これから考えるそうですが、昨年閉鎖された同工場は昭和34年に創業されています。名称からも分かるように同社はもともと製薬会社でした。敷地にはかつて東洋高压の倉庫がありました。では、近現代史をもう少し遡ってみましょう。それ以前には「松竹映画都市株式会社（松竹不動産部）」の開発地でした。同社の撮影所は、何故に蒲田から大船へ移転したのでしょうか。そこには大正10年以来「大船田園都市株式会社（東京渡辺銀行）」による大船開発があったからです。同社が特異な事由から倒産後、松竹はその一部を購入しました。しかし、住宅用分譲区画ははかばかしくなく、資生堂・福原氏が松竹の役員であったこともあり、住宅から転向して工場用地として販売することになり、芝浦・東洋高压・三菱電機などの進出に繋がりました。

しかし、当初の松竹による映画都市建設の動きに賛同した鎌倉町は、同計画9万坪の内、2万坪を無償でこの同社に寄贈しています。大船の発展にかけたと言える出来事です。今回の報道では、資生堂からわずか5,200㎡が戻る、という話しです。この地の近現代の歴史を振り返るとき、これらの史実は忘れて良いのでしょうか。

大船市街地の多くは湿地帯（水田）でした。大変な埋立工事後、わが国最初の英国を模倣した「田園都市計画」が動き始めました。当時、大船駅東口はありませんでした。観音口が唯一の玄関口であり、いまの“田園踏切”を渡り、遠回りして東側地区へ出かけました。大正10年に「東京渡辺銀行」は、この地へ通称“新鎌倉”と呼ぶ理想郷の開発を考えました。しかし、震災後の経済恐慌の煽りを受け、また同行の存立が危ないと言う大蔵大臣の発言などもあり銀行は倒産、大船の開発計画も中止されました。その跡地（駅から離れた）の一部を購入したのが松竹映画の不動産部です。いま、大船に散見できる「田園」の呼称（地名・店舗名など）には、そのような

過去の歴史がありました。

・大船開発はわが国の近現代史を刻む「理想郷計画」

都内の他の田園都市計画（田園調布・国立）に比べ、計画内容でも注目される大船は、大正末期から昭和初期にかけて、鎌倉に近接した理想郷を目指していました。

この辺りのことは、市民はどこまで既知のことでしょうか。建築家・藤谷陽悦による『幻の田園都市から松竹映画都市へ』（鎌倉近代史資料集第13集）によると、駅前には広場を設け、2か所のロータリーが計画されています。中心の住宅地は、併行する2本の道路の間に敷地が背中合わせに計画され、今日の土地区画もこの大正時代の土地割りのままだに残っています。土地の背割り、家の正面が道路に面して並ぶ形式の洋風家屋は、当時15戸を数えました。いまでもわずかに残る家屋には、市によって「景観重要建築物」として指定されています。下見張り、屋根の形、洋風建築に、田園都市つまり英国流の「ガーデンシティ」を、渡辺一族がこよなく愛した様子をうかがい知ることにも出来ます。中心地に残る「山蒼稻荷神社」には、開発に絡む“由緒碑”が建立されています。

購入した松竹は、小規模な分譲住宅地を計画したことが、当時の販売冊子から伺えます。今もバス停や信号機に残る「松竹前」、また大船郵便局前の砂押川の橋梁に「奈竹大通橋」を見ることが出来ます。また砂押川沿いにソメイヨシノが植栽（当初は1,200本）されていますが、これは松竹の開所を祝し、東京の新聞10社から寄贈されたものです。赤く着色された歩道は、俳優が歩く赤絨毯を象徴しています。

・昭和初期の開発計画に関わった鎌倉町当局

松竹不動産部の開発計画9万坪、そのとき市は2万坪（66,000㎡）を寄付したと云いました。当時は有名企業による大船開発に、町当局の期待感が良く分かる出来事です。今回その関連地を購入し、大型マンション計画を実施するH不動産は、この経緯をどこまで理解しているのでしょうか。市側にしても同様です。

市に寄贈される土地は、広さにするとわずか5,200㎡です。“寄贈”の文語が、この話しの最初にもあったように、何か凄いことを事業者側が市民に対して行った！と考える前に、大船の近現代史を的確に理解することが必要だと考えます。それは、過去の（中世の鎌倉など）地域史とは全く異なる見方です。

この後に、地域をどのように捉えるべきか、そこに「地域学」の存在意義があることをお話しします。

2）国（文化庁）の考える「近現代史」

・近現代の埋蔵文化財を考古学的に解釈する

鎌倉では、今まで主に中世遺構を発掘してきた（むしろ中世面で発掘を終了）が、本来、考古学とは過去の人物の物質的痕跡を扱うものですから、あまり歴史区分は関係ないと思います。近世や近現代でも考古学の対象になるのです。このことが、何故か私たちの思考の中から欠落しています。証言や文書資料の他に“物的証拠”というのがあります。証言つまり聴き取りは断片的に陥りやすくなりますし、文書資料は焼却処分される恐れもあります。しかし、考古学によって明らかにされる物的証拠は重要です。埋蔵文化財を呈示できれば第三者を認めさせることもできます。地下にある証拠品は実に大切です。

平成10年9月、文化庁次長通知「埋蔵文化財の保護と発掘調査の円滑化等について」では、発掘調査や保存活用に関する判断を示しています。その中では、埋文として扱うべき遺跡の範囲の原則が述べられています。遺跡の定義として、中世までに属する遺跡を埋文として扱うことが明記されています。さて、近世については、地域において“必要なもの”を対象とすることが出来るとしています。一方、近現代の埋文については、地域において“特に重要なもの”としています。

つまり、各自治体は、中世までのものは「埋文」として扱わなければならないことになりました。近世以降については、地域で考えるようになったので、自治体ごと対応が異なるということです。この通知の本意は、発掘調査の円滑化にアクセントがあるために、開発工事の円滑化と読み替えることも出来ます。

・歴史都市「京都」の近現代史に対する施策

鎌倉と常に比較される京都府（府教委）では、近現代遺跡を埋文としては認定していません。舞鶴の軍港（ユネスコ記憶遺産）、伏見や福知山の師団跡も開発によって破壊が進んでいます。これらは、地元にとって重要でなくともわが国の近現代史にとって重要なものです。京都府は近現代史を軽視し、とくに戦争遺跡は“負の遺産”と考えているのでしょうか。しかし、近代化の基になった「琵琶湖疏水」遺構だけは、特に重要なものとして評価をしてくれています。

近現代の埋文は、数も多いので認めたら大変だということもあるでしょう。また、自治体にこの時代が分かる専門スタッフがいなく、そして大学にも「近現代考古学」が開設されていない現状があります。しかし、立命館大学の「戦争考古学（戦跡考古学）」の例のように人気講座もあります。

3) “自地域”を知るための地域学的な視点

・全国に成立した地域学ブームの火付け役

みずからが居住する地域である「鎌倉」に関して、近現代史に着目した「地域学」を立ち上げる必要性があります。地方にあっては、地域の活性化につなげるための「〇〇学」が盛んです。おそらく全国には3,000程の開設があるでしょう。その運営母体は、NPO法人、研究機関、自治体など様々です。

東北地方を例として紹介しますと、早くも昭和63年に「山形学」が地理学者である米地文夫山形大教授によって開講されています。これには、山形県（生涯学習文化財団）も全面的に協力し、毎日のように県内の各都市で講義・ワークショップ・フィールドワーク・シンポジウム・パネルディスカッションが開催されています。

また平成17年に結成された「会津学」では、年刊の『会津学』や『会津学叢書』を刊行するほどの成果を上げており、平成18年の叢書にはあの著名な英国人旅行家イサベラ・バード（『日本奥地紀行』著者）による「会津紀行」が掲載されています。また「東北学」の提唱者として高名な赤坂憲雄（民俗学者・福島県立博物館館長・現在は学習院大教授）も寄稿しているほどです。

・大学における「地域学」開講の事例

1989（平成元）年に開設された多摩大では、寺島実郎学長が力を入れて実践している「多摩学」があります。そこには学生と教職員とが力を合わせ、多摩地域の歴史や埋め込まれたDNAを掘り下げるべく、地域性の探求が盛んになっています。

そこには、学長の提唱する“グローカリティ(Global+Locality)”を確認するところからスタートし、多摩の地を日本全体、いや世界へつなげる努力をしています。江戸期には、武蔵国21郡の多摩郡であった地域が、“八王子千人同心”（在郷武士団）として半士半農の郷土として活躍し、総合武術である「天然理心流」を基本に、一部の人たちは京都へ新撰組として向かいました。そこには、幕府直轄地の多摩に住む若者が幕藩体制の動揺をいち早く感じ取り、政争の中心地である京へ引き寄せられていきました。

その間にも、日光東照宮の警護役（1652年）や、朝鮮通信使一行が日光を詣でる時には警護を担っています。さらに、千人同心の一部は蝦夷地の警備と開拓（1800-1804年）にも就き、ロシア接近による幕府の対応に一役買っています。つまり屯田兵の原型は八王子の武士たちによって築かれたと考えても良いでしょう。

明治期になると、大政奉還後の“自由民権運動”に組み込まれていきます。そこには「戸籍法」公布によって平民として位置づけられたことに反発し、神奈川県令・陸奥宗光の運動にのめり込んでいきます。つまり、近世から近代にかけて、八王子に代表される多摩の本質とは、いったい何であったのだろうか。江戸に近いという“近隣性”から都合よく徳川体制に利用されてきたのです。にもかかわらず、明治以降は正当な権利（士族）が認知されることを求め続けるところに、多摩の本質、象徴があると考えられます。

“自地域”を知る努力を、全学挙げて取り組む姿がまさに地域学の本質に迫る感があります。

・いま、なぜ地域学なのか

1990年代後半から、地域学は経済界や地方行政でも盛り上がりを見せました。急速に全国へ広まった理由としては、1980年代から地方分権の広まりによって住民間の意識の高まりも大きかったと思われます。また、全国的な都市化の結果、地方の個性が喪失する危機感も影響していました。

最近よく云われるグローバル化・一極集中・地方空洞化・少子高齢化などなど、地方を取り巻く環境は困難な状況にあります。それらに対する自治体や住民の危機意識の高まりこそが、地域学を成長させてきています。つまり、自地域の自然や歴史、文化、ヒト、生活などにまつわる事象を総合的に捉えることが求められています。

【質疑応答】

Q：明治期には、大船にも明治天皇が行幸されている。市民にその史実も残されていない。先生はどのようにお考えか。

A：そういうこともあるし、例えば別のことで、御成小の旧講堂にヘレンケラー女史が訪問して講演をしていますね。当時の写真にも残っていますが、それを市民の中で共有しているかどうかですね。なぜ御成小だったのか。そこには様々な人脈もありますが、その辺りのことも認知されていないのでは。

ですから、近現代史はほとんど分かっていない。まして、話題にした地下の近現代史の遺跡は関心の外ではないかということです。お話しすることを忘れていたのですが、高知県の県立坂本龍馬記念館で、2010（平成22）年に龍馬が使った拳銃と同じ物を展示しようとしたら、国から銃刀法違反であるといわれました。博物館の刀や拳銃の展示で、許可が下りるのは管理者が公務員の場合だけです。坂本龍馬記念館は、県立の博物館であり、その職員は当然に公務員（県）のはずです。ではなぜ銃刀法違反になったのでしょうか。実は高知県が博物館に県職員を派遣せずに、財団に任せたからです。第3セクターである財団職員は、もちろん公務員ではありません。ですから国は、法律違反として展示を見送らせました。どうしても刀剣類を飾る時は、刃の部分全てを削り、例えば戦争時の拳銃の場合には銃身を外してバラバラにするしかありません。それでは近現代の史実はすべて崩れてしまいます。正しい検証にはなりません。博物館で何を展示するかという時には、銃刀法という法律と絡むことも知らなければなりません。

Q：なぜ鎌倉に鎌倉学がなかったのか。

A：文学や文化全般の方々が集まった鎌倉アカデミアのような伝統的なスクールはありました。そこでは専門家個々人が専門領域の話しをしたのであって、ある共通認識を元に、何かの集大成をしようとする方向が弱かったのかも知れません。

やはり鎌倉というところは、市民感覚が如何なものでしょうか。私も北鎌倉在住なのですが、鎌倉市民であることに舞いあがっていませんか。東京人に向かって「私、鎌倉に住んでいるんですよ」と言うことの本心にはどのような内容が隠されているのでしょうか。私の反省も含めて申し上げます。ですから、ご質問のように鎌倉で地域学を立ち上げていくと、いろんな形で全国に波及（発信）する影響力はすごいものがあると思います。現実

には、類例が各所で行われていたとしても、大きく統一性のあるものとしては完成していません。

鎌倉女子大での鎌倉学を始め、同類は毎年いずれかで実施されていますが、とくに市民にフィードバックされる成果が未知ではありませんか。

Q：大学が中心になっているということですか。

A：それは、市民を受け入れる会場をもっていますし、国の指示として大学の地域社会への貢献と云う目標もあります。

Q：全国でもほとんど大学が中心ですか。

A：そうだと思います。

Q：鎌倉には大学が多くありませんが。

A：集う場所がどのように確保できるかは、地域学開講にあたってのカギになるかと思われます。

Q：鎌倉市役所の移転についてどう思われますか。

A：検討は進行中と聞いています。先に経営企画部が中心となって市民へアンケートや市民委員を募集していましたね。市役所はどうあるべきか、各年代を集め議論しています。しかし、個人的にはその前にすべきことがあると思われるのは、国がガイドラインや策定手順を示している公的不動産（PRE）に関する議論です。本市の場合でも、総合的な専門機関を立ち上げ、その議論を踏まえて市民協働の歩みになると考えます。例えば県内では秦野市が全国から注目されるようなPREの検討をしています。今、不動産の1/4が公的不動産だと云われています。したがって、近年、この問題への取り組みは注目されています。

4. ワークショップの記録

（1）鎌倉の別荘地時代研究会担当チーム（司会：記録：発表：島本千也）

鎌倉にとって必要不可欠な近現代史資料

町づくりのキーワードは保全体制の充実

鎌倉の近現代史は日本の近代史ともかさなっており未だ研究不足である。鎌倉中央図書館内の近代史資料室は鎌倉市としての位置づけが低く残念である。古くからお住いの家などに残る文書、寺の過去帳などそれを保存、分析することが大切であり、そのことによって町の歴史がわかるが、その受け皿がアイマイである。鎌倉における戦争の足跡（三浦半島～千葉・館山の戦跡をまとめたもの）について、市民が調べ記録しているが、そのことが知られていないのは残念です。もっと町の歴史を大切に作る対応を期待する。たとえば、近代史資料室は現在週3日しか開いていない。毎日開けるように人員の確保等をして欲しい。

郷土資料館について

鎌倉に郷土資料館がないのは不思議である。子どもたちへの郷土についての学習、教育はどうなっているのか。見られる、触れることのできる郷土資料館が欲しい。どのくらい近現代史資料があるのか、どのように保存されているのか、埋蔵文化財の考古資料の扱いは、何れも生かされていないのではないだろうか。近代史を調べるには文献等資料である程度調査等で知り得ますが、子孫の口がかたく知る方法に苦労しています。

「地域学」は子ども（の教育）にとっても、大人にとっても大切

近現代史資料として残すにあたっては鎌倉の「地域学」を立ち上げる必要がある。同時に、子どもたちに伝える方法も考えたい。市民参加の場、学びの場をどう提供するか。そのためには、本日のような講演会・ワークショップをもっと開く必要がある。鎌倉市には寄贈された建物などが多数ある、その中には使われていない未利用建築もある、それを使うことも考えたい。空き地、空き家の活用、行政とボランティアの連携など自治体に頼らないことも大切。地域の範囲を絞って、狭くして調べると理解が進む。湘南地域の近現代史に関わ

る団体の連携、人材の育成など必要なのでは。

町づくりのキーワードは保全

都市保全がまちづくりの重要テーマ。それには近現代史資料が不可欠。近現代史を使えるように、レファレンス機能をもたせたい。旧図書館が長谷の旧諸戸邸と同じ学童施設と子どもの家ではもったいない。せっかくの建物の価値が生きてこない。鎌倉市は市民の大切な財産の用途について、市民に一切諮ることなく使用目的を決めた。市民が行政になめられているのではないだろうか。又、鎌倉市民は、鎌倉に住んでいることに安住して地に足が着いていないのではないだろうか。旧鎌倉図書館は鎌倉らしい情報に集中してほしい。

(2) 図書館とともにだち・鎌倉担当チーム（司会：阿曾千代子、記録：黒瀬聖子、発表：浅野雅樹）

1. 今後、鎌倉の近現代史資料をどうするのか？というテーマで問題点をあげてみたところ、

そもそも近現代史資料に関する情報が公開されていない、知られていない、故にその問題点も広がっていかないという声が多く上がった。具体的には次のような意見である。

- ・ 鎌倉の近現代史資料といっても、どこに行けば見聞きすることができるのかわからない。コピー資料でいいのでとにかく公開してほしい。
- ・ 図書館の近代史資料室に紙媒体だけでなく様々な資料が集積されているが、利用しやすい形で整理されていないし、一般には公開されていない。
- ・ WEB上の公開が殆どなく、探すのも大変。
- ・ 次々と古民家が失われていっているがこれらも近現代史資料だ。保存活用する手だてが求められている。
- ・ 地域の記憶（明治天皇の大船行幸、関東大震災の復興のための大船競馬場の記録、北大路魯山人の工房、兵器製造への学童参加、回天の製作、田園都市に住む俳優たち、大船山蒼神社に残る昭和中期の大船の航空写真など）は積極的に掘り起こさなければ消えていく。
- ・ 地域の記憶が掘り起こされ、冊子等でまとめられても限られた地域の人たちしか知らないという状況。
- ・ 鎌倉市で近現代が重視されていないためか、市民の中でも身近な（家族などの）経験や思い出も、町の歴史につながる、という意識、認識が低い現状。
- ・ 近代史資料室で写真資料（寄贈写真）の整理をボランティアで手伝ったが、予算や職員をきちんとつけて取り組むことが必要と痛感。また、戦跡資料などが充実していることをもっと市民に広く知らせなければならない。映像資料が少ないが、時代的にないわけではなく、掘り起こされていない可能性がある。
- ・ 図書館100年史編纂に関わったが、図書館だけでなく必要な市役所の行政資料もなかった。

2. そこで、考えられる解決策を語り合ったところ、近現代史資料館の必要性が多く上がった。

その前段階として、取急ぎ図書館の近代史資料室の人材、予算を充実させることや、新しいハードを建てるというよりも、旧図書館等近現代史の拠点としてふさわしい場所を活用して近現代史資料館を作ること、市民団体が一部業務を請け負うなど官民共同で運営することなどが提案された。

なお、そこを基点に、市民、行政、民間が共に学びあう鎌倉学講座を開催する、定期的に近現代史資料の展示公開日をつくる、企業とのコラボレーションでデジタルアーカイブ化を進める、著名人協力の下「近現代史（？）大使」を使命する、鎌倉近現代史キャラクターを選定する、等次々とアイディアが出された。

(3) 鎌倉市図書館担当チーム（司会：中田孝信、記録：浅見佳子、発表：梅沢典雄）

○近現代史も埋蔵文化財の範囲という認識をあらたにして刺激的だった。図書館の近代資料室の役割はやはり文書資料、写真が出发点だと思う。しかし場所がなく、整理しきれない。総合的に検討すべきことと思う。

○鎌倉へ引越ししてきたころ、市の女性史編纂事業が始まり参加した。編纂中は場所が確保されていたが、そのあと、調査に使用した資料の保存場所がなくなり、困った。縮小して図書館近代史資料室にほんの少し残った。たいへんな労力をかけて築いたものを保存しておかないと、その続きの研究ができなくなる。集えて保存する場所がほしい。

聞き取り調査も資料にするには、今急がなくてはならない。そのためにも場所が必要

○鎌倉では様々な地域誌が作成されている。しかし、中核は図書館だと思う。図書館ランチとして近代史資料室を考えたい。資料を集める場所の確保が前提になる。やはり市の後押しがほしい。

○田園都市の話は祖父からきいていた。「田園の梅澤さん」とも呼ばれていた。戦争遺跡の話もきいたことがある。

市民はそれぞれ断片をもっているが、それを歴史としてどうやって集めるかが問題と思う。

鎌倉は町としてはまだまだ若い。過去の栄光とか歴史的名前のイメージによりかかっている。

大きく鎌倉、というのではなく、まずは地域の 100 m² の中の話し合いから始めることが良いと思う。

○16 ミリフィルムは鎌倉の歴史の宝庫である。終戦直後の修学旅行のための情報フィルムとして作られたものがある。保存状況の悪化でフィルムの活用整理がままならない。権利処理の難しさもあるが、映像資料の再生をお願いしたい。

○コンテンツの歴史的価値と芸術的資料としての価値両面から考える。各地の情報を集めそれを地元に戻すには、デジタル化と人材育成、発信力が大切。権利処理は多少あともわしにしても、とにかくデジタル化して資料を残したい。場所と何より人が必要。

まとめ

地域学の理解が今後ますます必要。文化行政の薄さ。市がやらないならどうする？集い、整理し、保存する場所の確保が急務だが、何とか工夫してできないか考えよう。100 m²（地域）の話をしていこう！

（４）かまくら女性史の会担当チーム（司会：郡司春乃、記録：高階志津江、発表：多和田真理子）

グループには、近年鎌倉に転入してきた人も多かった。鎌倉のことを知りたいと思っても、その元になる資料のありがたかわからない。「ここに来れば鎌倉のいまと昔がわかる」といえるような、資料の集まっている場所がない。古い資料があるお宅が、どこかに寄贈したいと思っても持っていく場所がない。子どもに鎌倉のことを教えたいと思っても、私たち自身も実は鎌倉のことをよくわかっていない。そういうことを話したり学んだりするために市民が集う場所もない。今の鎌倉には、鎌倉を知るために必要なものが足りなさすぎる。など、様々な課題が挙げられた。

子どもは歴史に興味を持っているし、近現代史は現在の生活に直結することとして重要である。また、鎌倉の子どもたちに「地域プライド」を育てていくことは大事だと思う。それはつまり、子どもたちが将来、鎌倉に住むことを選び、この社会システムの中に生き、文化的な営みを続けていきたいと感じられるようにしていくことだ。だがそもそも、なぜ子どもたちは、近現代史を学ぶ必要があるのだろうか。なぜ鎌倉のことを学ぶ必要があるのだろうか。「郷土愛」をもつことができるから、とまずはいえる。しかしそれは、ナショナリズム（国への思い）につながるものを必ずしも意味しない。

重要なことは二点ある。第 1 に、「鎌倉らしさ」といっても実は多様で、地域や生業によって暮らしぶりもさまざまであること。話し合いの中で、子どもが「…だべ」という地の言葉を使っているのを聞いて感激した、という発言があり、「うちの辺りも言いますね」「うちの近くでは聞いたことないなあ」など盛り上がった。また、近現代の鎌倉というと別荘族のイメージが強いが、農民、商人、大工などそれぞれの生活を庶民はしてきたのであって、そうした庶民の記録を集め、掘り起こしていくことが大事である（近代史資料室はここに重点

を置いて資料収集をしてきたし、女性史の会の活動も同様である)。

第2に、子どもに近現代史を教えることの重要性は、過去の人々の生活を知ることによって、生活の知恵や反省も含めて子どもたちが学びとり、自分たちがどう生きていくか、主権者として将来この社会をどうつくっていくかという、主権者教育としての面がある。そのために戦跡や戦争体験談を残していくことも大事になってくるのだし、庶民の生活の記録が残され、活用されることが必要になる。

現在、鎌倉の「地域プライド」は上滑りしている感がある。歴史は確かに重要だが、それはあくまでツールである。子どもに教えるだけでなく、まずは大人どうしのつながりが大切である。そのために、やはり市民の集まる場所、資料が集まる場所としての資料館は不可欠だ。

5. 第2部を聴いての感想：永野先生

討論事項の内容に意見を言う立場ではありませんが、皆さんから具体的な話が多く出されました。市民レベルの話し合いなので、本来、行政側（職員）が同席し、協働体制が採れれば理想なのですが・・・。

残念ながらこれはもっと時間が必要でしょう。資料館の建ち上げにしても、場所の問題や資金問題が発生します。市民サイドからは意見を出す、そこまで終わることが多い。これからは、資金（予算）の流れを認知することも大事ではなかろうか、国・県からの補助金の流れを知らないといけない。次のステップにのぼるためにも重要なことです。さらに、市民と云えども法律・政令・条例について知らなくてはならない。それら法規制が市民活動の目標達成に、どのように関連してくるのかを知らなくてはならない。世界遺産登録の「バッファゾーン」のもつ意味に関しても、なかなか説明されることは無い。ユネスコがBZをこれまでどう考えているのかを。

同様のことは、「歴まち法」への理解がどこまで進んでいるか。同法による行為（現実的な補助金行政）が、どこの部署で企画されるのか。他の自治体では、多くが都市計画部門と聞いています。それでないと具体化する方策の立案が難しいからでしょう。

鎌倉に関わる重要な法律も、中世の歴史を知ると同じに、勉強会等を通じて、知っておく必要がある。日本大での「鎌倉学」も6年が過ぎました。この間に招聘した外部講師は50名近いでしょう。遅ればせながら早稲田大も学習院大でも鎌倉学をたちあげています。むしろ、鎌倉の地で、まさに「自地域」を学ぶ機会が遅延しているのではないのでしょうか。

鎌倉を知ると日本が見えるし世界が見えてくる、そんな動きに期待したいと思います。市民がもっと自信を持って行動したら如何なものであろうか。「ハザードマップ」の全戸配布と同様に、当市の「遺跡地図」を全戸に配布することも出来るでしょう。市民目線の近現代「遺跡台帳」を作成しデータベース化する作業もあります。それが、もう一段ステップアップできませんか、と云ってきた真意です。向こう岸にいる役所職員は、個々がテクノクラートのはずです。市民が課題難問に費やす時間は、彼らの比ではありません。もっと市民と職員とが議論する場が欲しいですね。ある自治体では、難しい問題が発生しそうなときは、役所だけで企画することを避けると聞きます。市民の協働こそが、逆に時間ロスも少なくなるようです。その仲介の労を、本日も出席して下さっている議員さんをお願いしたいと思います。

横松(司会)

3回目だが新しいスタートとなった。

継続して育てていきたい。アンケートに、お名前ご住所を書いていただければご連絡申し上げたい。

次の発信をしたい。まとめをお送りします。ありがとうございました。

永野先生おつかれのところありがとうございました。

実行委員長：島本千也、司会：横松佐智子、記録：浅見佳子・三嶋紀子・郡司春乃



鎌倉の近現代史資料について

講演とワークショップ

【日時】

2016年 **11月5日(土)**

13:30～16:10 (13:00 開場)

【場所】

鎌倉市中央図書館

〒248-0012 御成町 20-35

3階 多目的室 **入場無料**

【申込み方法】

電話 0467-25-2611

メール kama-lib@kanagawa.email.ne.jp

★件名に「近現代史」と入れてください



【プログラム】

第Ⅰ部 講演

「地域学の確立と 近現代史資料の役割」

講師: 永野征男

(日本大学名誉教授)

〈プロフィール〉 専門分野は都市地理学/地域論。

理博。「講座・鎌倉学」を永年にわたり、日本大・鶴見大などで開講中。鎌倉の地域問題にも精通し、現在、市の各種審議会委員を務めている。山ノ内在住。

第Ⅱ部 ワークショップ

「どうするの？ 鎌倉の近現代史資料」

鎌倉の近現代史資料の収集・保存・活用について(パート2)

～近現代資料館・文書館・学習交流館設置をめざして～



7、参加者のアンケート・感想より（参加者数、55名、アンケート 提出 29名）

1) 今回の催しを何で知りましたか

広報かまくら 5 鎌倉萌 0 図書館 HP 5 図書館ツイッター 0 ちらし 4 ポスター 0
お知り合いから 16 メディア等（実行委員 2 TOTOMO 1 女性史の会 2 鎌倉朝日 1 NPO 1）

2) 今回の催しの感想

とてもよい 18 よい 8 ふつう 3 やや不満 0 不満 0

その他の感想

- ・大切なことを学んだ。 ・永野先生の話が良かった。
- ・永野先生のお話がとてもわかりやすく、特に「地域学」という言葉の意味を知り、目からウロコの話でした。
- ・永野先生のお話に大変刺激されました。地域学をなぜ深めるのか。大人にとって、子どもにとって、その意義を考えていきたい。
- ・「鎌倉学」をはじめて知りました。
- ・初めて聞く話が多く、とても興味深かった。先生のお話も、テンポよく、大変理解しやすかった。
- ・講演会で、資料の保存管理の問題について言及されない点が残念。
- ・ワークショップも中身のあるもので、素晴らしいと思います。
- ・第2部が良かった。 ・今後も同様のワークショップを続けて欲しい。
- ・ワークショップ結果を公表してほしい。
- ・いろいろな世代の、いろいろなご意見をうかがえて勉強になりました。もう少しゆっくりお話を聞きたかった。
- ・意見交換する場は、とても重要です。ありがとうございました。
- ・行政共働（ママ）？協働を望みます。
- ・市民の話し合いはもりあがりますが、市長と行政の職員がいらっしゃらないのが残念。

3. 鎌倉市図書館のご利用について、

①今まで利用したことがある 28 ない 1

②図書館にご要望、今後の催しについての希望

- ・もっと、広報に力を入れましょう。
- ・図書館は市民の大切な居場所であり、行政は大切にしてほしいです。図書館をもっともっと豊かに、歴史資料館を市民と行政の共働（ママ）？協働で作りたい。
- ・今日のテーマで言えば、近現代資料室の整理と充実。・話し合いが良かった。
- ・このようなイベントは、定期的に開催したいですね！
- ・次回もこの企画をしたら良いと思います。
- ・とにかく資料館を立ち上げましょう。
- ・第4回も、楽しみにしています。
- ・本日の続きをぜひ！！永野先生も、ぜひぜひ！！
- ・経過報告を聞き読むと、この近現代史資料保存の取り組みも、シンポジウム・講演会・見学会・ワークショップなど今年につながっています。継続は力です。積み上げて、広げて、世論で、鎌倉市を動かしましょう。
- ・生活学習センターとして、立派なものにしてほしい。
- ・60分で、いい講演聞けました。ワークショップあの時間で、みんなの発言をまとめられ、特に、最後のグループのまとめが終わりにふさわしいものだと思います。

別冊 かまくら図書館だより

=====記録集=====

「鎌倉の近現代史資料」

発行 鎌倉市中央図書館
発行日 平成29年2月15日
企画・編集 ファンタスティック☆ライブラリー実行委員会

〒248-0012 鎌倉市御成町20-35
TEL 0467-25-2611

* 図書館 HP でもこの記録は御覧いただけます。 <https://lib.city.kamakura.kanagawa.jp>